

倉田 悟* 伊豆諸島の南方系植物

S. Kurata : Southern Elements in the Flora of the Izu Archipelago.

Ⅰ 序 黒潮洗う南の島として伊豆諸島の植物は我々の注意を索かずにはおかない。つとに明治20年白井光太郎・大久保三郎氏等がこれ等の島々を巡行し、その報告を物された事は如実にこれを裏書きしている。私も昭和26年秋大きな期待を持つて三宅島へ渡り、1週間島内のあちこちを歩いたのだが、見事その期待は裏切られてしまった。成程、始めに訪れた東海岸椎取神社の原始林では、スダジイの老樹上高く着生するタニワタリの勇姿と林床を埋めつくすイシガクマとアオノクマタケランには思わず歓声をあげた私である。又、神着村の宿舎近くのちよつとした谷に入ると、雄大なリュウビンタイやシロヤマシダが茂る中に点々とハチジョウシダが自生し、路傍のハマホラシノブや明治塘岩の辺縁に果しなく続くタマシダの大群生に感激した事も確かである。しかし2・3日経つと、そのフロラの意外に南方色の薄いのに私は失望した。勿論フロラの構成は主に暖地性の種類よりなるが、その大部分は伊豆・房総両半島で見慣れたものであつて、西南日本の紀州・四国・九州・琉球方面からこの伊豆諸島に達し而も伊豆半島や房総半島に達していないといった植物は、大変数少い。この事実は伊豆諸島全体のフロラを検討しても全くその通りである。一方、前記の椎取神社の景観或は八丈島のヘゴの自生地を見た人は、島々の温度条件が十分南四国・南九州方面に匹敵する事を納得されると思う。事実、八丈島の年平均気温は18°Cに近く、ほぼ屋久島に相当する。では、かかる気候条件下に何故南方色の貧弱なフロラしか存在しないのだろうか。

Ⅱ 伊豆諸島の羊歯 上に提起した課題につき注目されるのは伊豆諸島のシダとランである。実はシダとランだけは例外であつて、西南日本と共通した著しい亜熱帯性の種類がかなり分布している。シダではナンカクラン・ヒバゴケ・オニクラマゴケ・ホウライハナワラビ・ツルホラゴケ(第1図)・ニセホングウシダ・サイコクホングウシダ・ヘゴ・アツイタ・イヌタマシダ・ヒロハノコギリシダ(第1図)・アラゲヒメワラビ・オオバノヒノキシダ・タニワタリ・スジヒトツバ等で、之等は房総は勿論、伊豆半島にも全く発見されていない。尚、アツイタは伊豆半島に産するとの記録はあるが、確実な採集標本が保存されていないので敢てここに掲げ、ハチジョウシダとケホシダは最近伊豆半島にも自生が判明したので除外した(ケホシダの神津島産の記録は誤り、八丈島と青ヶ島産も検討を要する)。又、ムラサキオトメイヌワラビ(屋久島特産品)が八丈島に産するとの報告は誤りで、八丈のものは伊豆半島を北限とするアリサンワラビである。

之に対し、伊豆半島或は房総に産し、伊豆諸島には分布していない暖地性のシダの種類は大変数多く、志村義雄氏は伊豆半島につき69種を挙げられている。但し、ムラサキベニ

* 東京大学農学部森林植物学教室

Institute of Forest Botany, Fac. of Agr., Univ. of Tokyo.



第1図 ツルホラゴケとヒロハノコギリシダの分布
 + *Vandenboschia auriculata* ● *Diplazium dilatatum*

シダの伊豆産は疑問で、本羊歯は紀伊半島最南部、南九州、琉球に分布し、ヌカイトチシダモドキに極めて近似したものである。又、ヒロハヤワラシダという和名は元来ヨコグラヒメワラビに命名されたものであり、伊豆半島産はヤワラシダに含めておいて大過なきものであろう。更にオオベニシダ・ヒメカナワラビ・サジラン・コウラボシの伊豆諸島産は再検討を要しよう。

さて、伊豆諸島にないこの70種以上にも及ぶ伊豆半島の暖地性羊歯中、亜熱帯性の種類はシロヤマゼンマイ・テツホシダ・ヒメハシゴシダ・コクモウクジャケ・ハイコモチシダ・シンテンウラボシ・リュウキユウコガネ等に過ぎない。之等は紀伊半島南部或は更に西南日本から飛んで伊豆半島に分布して来ているもので、駿河・遠江・三河等には未発見であり、伊豆半島の温暖性を物語る著しい例ではあるが、先に列举した伊豆諸島の亜熱帯性羊歯と比して質量ともに劣り、やはり諸島中南部の温度条件の南方性が良くうかがえる。尚、従来伊豆仁科村白川のヒトツバイワヒトデとされていたものは、シンテンウラボシの小型品と考える。

次に、伊豆諸島には伊豆半島所産の暖地性羊歯の多くのものが産しない事実を考えて見よう。第1に諸島の環境が余りに暖かすぎて之等の種類の生育に不適當ではないかという事だが、三宅・御蔵・八丈島等の様に800 m以上の山もあり、事実イワイタチシダ・ミヤマイトチシダ・ヘビノネゴザ・サトメシダ・ヤマイヌワラビ・ヒメシダ・イヌシダ・ナツノハナワラビ等の、純然たる温帯性羊歯さえ自生しているのだからこの論は当たらない。第2に伊豆諸島は開析の進まない小島が多く、雨量は豊かであつても空中湿度の豊かな谷に乏しい事が伊豆半島に比して、多くのシダの生育にとり明らかに不利である。有史以来噴火の歴史がなく開析の進んだ水量の多い溪流を有する御蔵島と八丈の三原山には、他島に産しないシダが比較的多数生育している事実を注目されたい。ヒノキシダ・アオガネシダ・ミヤマノコギリシダ・ヒメサジラン・イワヒトデ(利島にもあり)・タカノハウラボシは

御蔵に、アオホラゴケ・タカサゴキジノオ・カツモウイノデ・ミドリカナワラビ(第2図)・ホソバイヌワラビ・アリスンワラビ(第2図)・タニイヌワラビ・ヒロハアツिता・イワヤナギシダは八丈に、ホソバコケシノブとヌリトラノオは両島にはほぼ限られて産し、伊豆半島にも産する種類である。

第3に伊豆諸島は絶海の孤島の集りで面積も狭く、新参の植物が其所へ到達出来る機会が伊豆半島より乏しい事は注意しなければならぬ。大島は面積が最大で而も本土に最も近く位置しているからこの機会に一番恵まれている訳で、他島に未だ到達していない植物が特に多いのは当然だが、他の島々のフロラにもそれぞれ多少の特長があつて、それ等は偶々その島に最初に到達出来た種類であろう。第4に伊豆の島々は火山活動が激しく、噴火により繰返し植生が破壊されるから、一度到達出来た植物にとつても決して安住の地ではない。三宅島のユノミネシダ自生地は昭和15年の大噴火の際、熔岩に埋められ絶滅している。御蔵と八丈三原山はこの点から見ても植物の安住の地であつた。以上三つの原因が温度条件からは考えられぬ伊豆諸島の暖地性シダフロラの貧弱性、又、一般フロラの貧弱性に関係している。

Ⅱ 伊豆諸島の蘭 里見信生氏の編まれた伊豆七島のラン科植物目録を見ると、45種類中、西南日本と共通で伊豆半島には達していないものがナゴラン・オサラン・ハチジョウシユスラン・シマササバラン・ガンゼキラン・ヒメトケンラン・ヤクシマネツタイランの7種に及んでいる事は、前項の羊歯の場合と同じく極めて著しい。又、鈴木泰氏は神津島でキヌラン属の1種を採られている。尚、ハチジョウシユスランは伊豆諸島特産品だが、大場達之氏は八丈島にてヤクシマシユスランに一致するもの及びカゴメランに近似のものをも採集されており、とにかくこの三者は別種とは考えられぬので、又、シマササバラン



第2図 ミドリカナワラビとアリスンワラビの分布
+ *Rumohra nipponica* ● *Athyrium arisanense*

も特産品だが、ユウコクランと同一種内に属するものであるから此所に列べた。

Ⅳ その他の植物 シダ類・ラン類に比して、その他の高等植物には、伊豆諸島と西南日本或は小笠原島方面とに共通で伊豆半島に産しない種類は甚だ稀である。木本植物ではハドノキ・ホウロクイチゴ・ナナメノキ・イソマツがあり、サクノキ・ハチジヨウモクセイ・コハクサンボクは近縁種が西南日本に分布するものとして注目される。草本植物においても、エダウチチジミザサ・ジングウスゲ・キノクニスゲ・イトテンツキ・アオノクマタケラン・シロシヤクジヨウ・ツルマオモドキ・ツルソバ・オムナグサ・ムニンケマン・ハマクワガタ・ブクリヨウサイ・フシザキソウ等を挙げ得るに過ぎない。又、これ等の多くは沿海地に生ずる植物である事は興味深い。

Ⅴ 結 論 以上の考察から、始めに提起した問題への解答は自から明瞭である。即ち、温度条件が如何に好適であろうとも、その植物が島々に到達出来るチャンスがなければ、フロラの1員たり得ない訳で、シダ類・ラン類の様に微細な孢子や種子を有するものは風力により、又、沿海植物の或るものは海流により長距離を運ばれる可能性があるから例外として、一般には伊豆諸島の植物は最も近距離に位置する伊豆・房総半島辺りから由来したものと結論されるのである。

[主要参考文献]

- (1) 倉田 悟：伊豆七島の植物地理雑考，野草 No. 151, 153, 154, 1952. (2) 西田 誠：伊豆諸島産シダ類余録，植物研究雑誌 31 卷，1956. (3) 里見信生：伊豆大島植物雑記（一），北陸の植物 6 卷，1957. (4) 志村義雄：富士火山脈・南部地帯における暖地性シダ植物，北陸の植物 6 卷，1957. (5) 鈴木 泰：伊豆諸島植物分布目録，1956. (6) 矢野正武：八丈島の羊歯植物，野草 No. 210., 1956.

Résumé

As the Izu Archipelago stretches in the Black Warm Current south of the Izu Peninsula, many subtropical plants which have not been collected in the Peninsula, are expected to occur there. Against this expectation, however, there are rather few subtropical elements which are distributed to the Izu Archipelago right from South-western Japan. In the Izu Archipelago under these circumstances, it is very interesting that in ferns and orchids there are found considerably many subtropical elements which have not been collected in the Peninsula. This fact is clearly related to the easier dissemination of ferns and orchids over wide distance (in this case, beyond sea). In ferns, *Lycopodium Fordii*, *Selaginella boninensis*, *S. Doederleinii*, *Botrychium daucifolium*, *Vandenboschia auriculata*, *Lindsaea cultrata*, *L. japonica*, *Cyathea boninsimensis*, *Elaphoglossum Yoshinagae*, *Dryopteris Hayatai*, *Diplazium dilatatum*, *Thelypteris oligophlebia* var. *lasiocarpa*, *Neottopteris antiqua* and *Cheiropleuria bicuspis* are such examples, and in orchids *Aerides japonicum*, *Eria reptans*, *Goodyera hachijoensis*, *Liparis formosana*, *Phajus minor*, *Tainia laxiflora* and *Tropidia nipponica* are those examples.

Moreover, the general poverty of the flora of the Izu Archipelago must be explained considering three causes: (1) its simple topography having few valleys, (2) poor chance for plants to be disseminated to such small oceanic islands, (3) destruction of vegetation by the repeated volcanic eruptions.

○ 薩摩大口のユズリハとインユズリハ (倉田悟) S. Kurata: Local Names of *Daphniphyllum* in Japan.

本州中南部、四国、九州にはユズリハとヒメユズリハが広く分布し、ツルノハ (九州)、ワカバ (四国、紀州)、シヨウガツサン (隠岐)、メンツアシ (周防滑国国有林)、イタガネ (周防柳井) などといった方言名もあるが、概ねユズリハの名が通用し、しかもこの両樹種に別名を与えて区別する例は少い。四国樹木名方言集 (1936年) によれば、ヒメユズリハが、イヌワカバ (土佐幡多郡)、イヌユズリハ (同、同高岡郡)、カタエズリ (同) と呼ばれ、真物のユズリハから区別されている。しかし、里人が正当のユズリハと認めるものが、何時もこの土佐の様にユズリハであるとは限らない。大口市羽月の麓部落では逆に、ヒメユズリハがユズリハ、ユズリハがインユズリハと名付けられている。大隅半島の鹿屋市高山事業所の榎木栄次郎さんは、高山では両樹種をユズリハといつて総称するほか、特にメズリハをホンユズリと称して正月の飾りに用いるが、日向南部の福島ではヒメユズリハをホンユズリハ、ユズリハをウマユズリハと呼んでいると説明して下さった。伊豆三宅島でもヒメユズリハがユズリハ或はユズノキと呼ばれ、ユズリハはジョウゴノキ或はケツツマリという特異な方言名を持っている。かようにユズリハの真物はその土地によつて異なる訳である。概ね、ユズリハは奥山に、ヒメユズリハは海岸近く或は低地に自生するから、正月用に里人が身近かに採取出来るユズリハがその土地によつて異なり、身近かに沢山ある方が自然に、真物のユズリハとされて来たものであろう。

○ 栃木県下のシライトソウ (里見信生) *Chionographis japonica* in Pref. Tochigi

裏日本では新潟県まで連続分布するシライトソウは表日本では不連続分布をしめす。静岡県東部、山梨県、神奈川県になく、埼玉県、東京都にあることが知られている。私は小川晃一氏から日光市律院産 (Jun. 2, 1957) の標本をいただいてこの種類の新産地かと思っていたが、既に関本平八氏の統栃木県植物総覧 (1951) の98頁に小川氏が採られた場所と同じ所が明記されていた (22年星野聰郎氏採集)。シライトソウの東限産地であるが、あまり知られていない様なので、余白の穴埋めに記した。